

2025年4月13日 枝の主日 ルカ 19:28～40 「なぜほどかれたのか」

日本ルーテル教団 関東地区 北川逸英

本日から一週間、次の日曜日にイースターをお祝いする時まで、私たちは特別な七日間を過ごします。カトリックや聖公会などの教会ではこの時を聖週間と呼び、多くのプロテスタント教会ではこの時を受難週と呼びます。

この七日間は受難週の名前のとおり、イエスさまの十字架での死を憶える時です。そして日曜日の朝に、イエス・キリストの復活をお祝いし、私たちは礼拝します。一年を通して毎週日曜日に行われる礼拝は、主の御復活の喜びを忘れず、いつも思い起こすために与えられます。

この受難週の時、わたしたちすべての教会は最も深い闇の中にいます。けれど「イエスさまが復活された」その驚くべき喜びの奇跡には、その大前提として「イエスさまの十字架での死」が絶対に不可欠なのです。

思えば本当に不思議です。私たちは建物の上に十字架を高く掲げた、教会堂に集まります。礼拝堂の中では一番目立つ場所に十字架を置きます。だが十字架はイエスさまを死なせた、ローマの残酷な死刑の道具です。なぜそれを、私たちは拝むのでしょうか。また自ら身に付け、十字を刻む動作を行うのでしょうか。

そこに三つの意味があります。一つは私たちの罪のため、無罪のイエスさまが十字架刑を受けられたことを憶えるためです。十字架の上に私たちは、自分の犯

した罪を見て、自らの罪の悔い改めを祈ります。

二つにはイエスさまが、十字架の上でご自分が死なれる事により、私たちの犯した罪を赦された事を憶えて、神さまに感謝を祈ります。

三つにはイエスさまが、十字架の死から三日目に甦られた事を憶えて、ご復活を感謝を持って確認するためです。

イエス・キリストに従う私たちは、イエスさまの十字架上の死という、最も絶望的な出来事から、キリストの復活という、最も栄光に満ちた喜びと出会う事を知っています。十字架は、この大逆転のしるしです。

イエスさまは今日、二回みことばを語られます。一つは、
<「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」 >

これは二人の弟子たちに向けられたみことばです。ですからこのみことばを私たちが聴くときについ、「誰も乗せたことのない子ろば」と自分を重ねてしまいます。そして子ろばの持つ不安や戸惑いに心を寄せます。

しかし実はこの時この子ろばの心は、解き放たれた喜びと、イエスさまをお乗せした嬉しさ。また人々の喜びに満ちた歓迎の様子に、心躍る喜びを感じていま

した。

弟子たちの賛美の声は高らかに響きます。

「主の名によって来られる方、王に、

祝福があるように。

天には平和、

いと高きところには栄光。」

これはまさにイスラエルに向かわれるイエスさまを、「王」として讃える賛美です。しかしそれが、イエスさまの罪状として、これから五日後に、イエスさまは十字架にかけられます。地上の弟子たちは嘆き悲しみ、十字架の前から逃げ去ります。

けれどそのすべてを主はご存知です。私たちの弱さも愚かさもすべて受け入れられて、主は十字架に向かって進まれます。ですから恐れる事はありません。

案ずる事もあります。私たちはただ、声を高らかに神を賛美し続けます。

イエスさまは次に、ファリサイ派の人々が、群衆の中からイエスさまに向かって言った「先生、お弟子たちを叱ってください」という言葉に答えて言われます。

「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」

主の力強いこのみことばは、鎖につながれて、暴力を受けて、虐待される多くの人たちに向かって「希望を持って」と語られます。どんなに絶望的な状況でも、

いや、まったく望みが消え失せた、暗闇の中だからこそ、神さまの栄光がそこに輝きます。私たちの主はすべての希望です。私たちは皆この救いの希望を担い、この地上の村から村を訪ねて行きます。そしてそこでつながれている者たちを解放します。皆が自由に喜びを持って、希望を担って、声高らかに神さまを賛美することが出来ますように。主を信じて、賛美の歌を高らかに歌いましょう。

人知では到底計り知ることの出来ない神の平安が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いを、守られますように。アーメン